摂食障害からの「回復」に関する考察

——回復の語りに見る、専門家言説への批判的検討と回復の再解釈——

2017 年度入学

社会学・地域福祉社会学

2021 年 1 月提出

[要約]

摂食障害の症状が和らいだり症状が出る頻度が下がったりして「回復」に向かう中で、摂食障害をめぐる専門家言説の枠組みについて再解釈したり、「回復する／しない」という二項対立から脱した生き方を見出したりする当事者がいるのではないかと考え、摂食障害から回復したと自認している「回復者」を中心にインタビュー調査を行った。先行研究としては「原因論研究」「回復論研究」「文化人類学研究」を取り上げた。先行研究の可能性や限界を踏まえて、摂食障害の原因や発症の経緯を単純化しないこと、語りの多様性を尊重しながらある程度の共通性を見出すこと、そして対象者の語りを社会的な視点から解釈すること、という3点に留意した。調査としては、摂食障害者・回復者合わせて7名（男性1名女性6名）に聞き取りを行った。対象者の語りから、5節に分けて考察を行った。1節では、発症原因は個人や家族等に単純化できるものではなく、多くの対象者が「発症のきっかけ」と、「摂食障害でい続けた理由」を切り離して語った点に着目した。そのため原因論の枠組みは、回復のためにとる選択の幅を狭めるものとして当事者に問題化される場合もあった。2節では、回復したと自認している対象者も摂食障害の名残や生きづらさを感じていた点に着目した。対象者が1人で考え抜く中で生きづらさの受容にたどり着いた例もあったが、多くの対象者は、医療従事者や他の当事者に相談するなかで生きづらさやそれを抱える自分自身を受容していた。自らの苦しみを落ち着いて見つめ肯定すること、自分の存在を肯定すること、そして生きづらさの原因と解決策を生活上の課題や自分の性向に見出すこと、そういった行為が対象者と他者との間で行われ、回復を後押ししていた。3節では、「リカバリー」の概念を土台に対象者らの語りを踏まえ、「回復」の再解釈を行った。回復とは「医療従事者や家族、同じ当事者に支えられながら、摂食障害後の生きづらさを、生きづらいと感じている自分も含めて受け入れていくこと。その上で生活課題や自分の性向に目を向けながら、生きづらさと上手く付き合っていくこと。そういった試みの中で自分の人生・生活を取り戻すこと」ではないかと考える。4節では、男性当事者が摂食障害患者として認知されず、回復のために適切なケアを受けられない状況があることに着目した。現状では、男性摂食障害者の調査・研究は進んでおらず、摂食障害は女性の病というイメージが普及している。そのような中で男性摂食障害者が自分から助けを求めることや適切な診断、治療、支援を受けることは困難である。今後、十分な資料の追加と、それに基づいた「男性の摂食障害」モデルの構築や回復モデルの検討、そしてそれを受けた医療・社会福祉制度の整備が必要である。

5節では、1節から4節までの論点と、当事者と周囲の人々の多様な関係性を通じて、どのような「回復」論を提示できるのか検討した。当事者と周囲の関係性それぞれが孕む課題に対して「支援者による外部の回復資源や家族支援の紹介」「医療従事者と当事者の共同決定」「医療従事者や家族らによる見守り」「公的な窓口や支援、医療との繋がり」という案を検討した。これらの案の課題点は「当事者や家族がアクセスできる回復資源の少なさ」「医療従事者や専門職が当事者と丁寧に向き合う難しさ」である。その克服のためには、当事者と周囲の多様な関係性の価値や、その関係性への切実なニーズが、医療従事者や支援者といった専門家や、利用者である当事者や家族、そして社会全体に認知される必要があるだろう。そしてそのために、摂食障害からの回復に関わる人々が集まって必要な支援のあり方や役割分担について話し合う場が必要なのではないか。そのような話し合いから治療・支援の現場のデータを蓄積し、国や地方公共団体に対して提言を行うことも視野に入れることができるだろう。

目次

1　はじめに……1
1.1　専門家言説の枠組みへの批判的検討と「回復」の再解釈……1
1.2　研究の目的……2
2　摂食障害について……3
2.1　摂食障害の概要……3
2.2　世界での摂食障害の歴史……6
2.3　日本での摂食障害の歴史……8
2.4　摂食障害の語り……9
2.5　「回復」「リカバリー」について……10
2.6　「摂食障害者」「回復者」について……10
3　先行研究……11
3.1　原因論研究……11
3.1.1　「個人」に着目した議論……11
3.1.2　「家族」に着目した議論……12
3.1.3　「社会」に着目した議論……13
3.2　回復論研究……14
3.3　文化人類学研究……15
3.4　小括……17
4　調査の内容……20
4.1　調査の概要……20
4.2　対象者のプロフィール……21
4.3　筆者が当事者であることによる影響……22
5　調査結果……23
5.1　対象者 A……23
5.1.1　A の調査概要とプロフィール……23
5.1.2　A の調査結果……23
5.2　対象者 B……26
5.2.1　B の調査概要とプロフィール……26

5.2.2 B の調査結果 26
5.3 対象者 C 28
5.3.1 C の調査概要とプロフィール 29
5.3.2 C の調査結果 29
5.4 対象者 D 32
5.4.1 D の調査概要とプロフィール 32
5.4.2 D の調査結果 32
5.5 対象者 E 34
5.5.1 E のプロフィール 34
5.5.2 E の調査結果 34
5.6 対象者 F 37
5.6.1 F のプロフィール 37
5.6.2 F の調査結果 37
5.7 対象者 G 40
5.7.1 G のプロフィール 40
5.7.2 G の調査結果 40
6 考察 43
6.1 発症の直接的原因・間接的原因 43
6.2 「回復」後の生きづらさ 45
6.3 繋がりのなかで取り戻す「回復」 48
6.4 男性当事者の実態把握・モデル化の必要性 50
6.5 本研究から構想する「回復」論 52
7 おわりに 57
8 あとがき 59
［参考文献］ 60